

# 名勝 伊江殿内庭園 2

伊江殿内庭園環境整備事業に伴う発掘調査概要報告



# 伊江殿内庭園発掘調査概要報告

## 1 はじめに

伊江殿内庭園は、那覇市首里当蔵町に所在します。ここは琉球王府時代の土族階級を代表する、また、戦災を免れた県内でも数少ない歴史的庭園です。昭和61(1986)年に国の名勝の指定を受けた後暫くは本格的な調査が行われていませんでした。

那覇市では、国・県の補助をうけて、保存整備活用を目的とした継続的な事業を立ち上げ、その一環として平成15(2004)年度より発掘調査に着手しました。

## 2 庭園の特徴について

伊江殿内庭園はすばらしい特長を有していますが、ここではそのいくつかについて個別に簡記します。

①池：岩盤を削り抜いて造り出された大小八つの池で構成されます。池はそれぞれに独立しており、微妙にその高さも違えられています。表面は漆喰で仕上げられ、美しい曲面を描いています。

②陽刻文字とその周辺：琉球石灰岩に漆喰で陽刻(貼り付け)された「巢雲」「漱石山房」「常」「喜」の各文字があります。最も高い位置にある「巢雲」の文字の施された岩の周囲には同様の直立した岩が幾つかみられ、幽玄な世界をかもし出しています。なお、「巢雲」「漱石山房」の文字等は、嘉慶5(1800)年に冊封のため琉球を訪れた趙文楷、李鼎元の筆跡を写し

たものといわれています。

③龍頭：頭部と胴の一部から成る、琉球石灰岩の岩盤を背にそこから迫り出すように架けられた樋です。龍の内部は中空になっており、水はそこを通過して、開いた口の舌を滑り池へと注がれます。

④水槽：龍頭から池に注がれる水を溜めておく貯水に関わる施設が龍頭後方の築山内に設けられています。

⑤園路：池や陽刻文字を中心とするいわゆる主庭部分には三つの園路があります。

一つは最も北側に位置する、龍頭の後背部の築山裏へと回り込むルートです。

二つ目は庭園の中央を通るルートです。主庭部分を横切るかたちで設けられており、自然の石橋や石畳を歩きながら庭園内の変化に富んだ造形の美しさを観賞することができます。

三つ目は「喜」文字後方を散策するルートです。天然の琉球石灰岩の岩盤を用いた階段などが設けられていて、「巢雲」文字の近くを通過して東南側へと至ります

## 3 発掘調査の実施について

平成15(2004)年度の着手以来、これまで8次にわたる調査を実施してきました(平成20年度および22・23年度については調査を実施せず、また平成24年度については平成25年3月現在調査中)。このうち平成17(2006)年度第3次調査分までについてはすでに報告し

ましたので、ここではその後に実施した調査の概要について述べます。

### 第4次調査(平成18:2006年度)

まず、前回の報告時点で調査中であった4次調査について触れておきます。報告したとおり、これまでの調査を踏まえ、建物跡の有無を確認するためさらに主庭部の西側へと範囲を広げ発掘調査を行いました。現在平場となっているここは、かつて表の本門を通過して御殿建物へと至る屋敷の顔ともいえる場所で、幾つかの門が配されそれに付随する石塀その他の施設があったとされています。このうち中門から建物へと至る途中の中庭、中庭から御殿建物内部の廊下から広間へと繋がる辺り、玄関、さらに直接庭へと入る園門、そしてその南側一帯など、それぞれの位置と目される箇所に掘削トレンチを設け発掘を実施しました。

その一方で主庭部を走る園路のルートを確認する作業も併せて行いました。主庭部を横断する各三本の園路は石敷きされて東側後方へと延びているのですが、いつしか石敷きは途切れていることからその先のルートの延長の有無を確認すべく発掘を行いました。

### 第5次調査(平成19:2007年度)

前年度第4次調査での状況を踏まえ園路の確認のための追加調査を実施しました。

また、初年度第1次調査において確認された築山内の水槽から龍頭までの水路について、さらなる確認作業を行いました。水路の具体的な位置や形状については概ね判明してはいたのですが、築山側部分においてはなお覆土や樹木に阻まれた箇所もあったのを、今回

詳細な測量図化に係る作業として実施したものです。

### 第6次調査(平成21:2009年度)

本庭園の最も重要な施設のひとつである池の状態を把握するためその観察作業を行いました。池は、冒頭でも触れたとおり琉球石灰岩に漆喰を塗布したそれぞれ独立した八つの溜井によって構成されていますが、これらを仔細に観察すると漆喰や岩盤そのものの傷みや後世の部分的な補修の痕がみられました。それらの詳細な記録をとりました。

他方、それぞれの池の縁のレベルの測定を行いました。

主庭部およびその周辺の下草の除去清掃作業を並行して行っています。

### 第7次調査(平成22:2010年度)

主庭部分の後方、築山裏手の園路から弓場にかけての斜面部の発掘調査を行いました。ここは上方の園路脇に土留めの石積みが見られますが、さらにその下方にも斜面に沿ってもう一段の石積みが斜面に沿って走っています。

### 第8次調査(平成24:2013年度)

3月現在、主庭部北方の更地部分発掘調査を実施しているところです。

## 4 調査の成果について

これまで4次調査以降の6次に亘る調査の成果についていくつかを述べてみます。

### ①建物部分に関わる遺構について

先の第2次・第3次に続き第4次調査では建物の存在を追う調査をメインに進めてきました。調査箇所は近年まで駐車場として使われていたため表層はクラッシャーで敷き均され、その下位においても大きく攪乱を受けていました。ただ、いくつかのトレンチで琉球石灰岩の切石による石積みの一部が検出されました。上部は削平により欠失したようですが地山であるマージ(橙色の琉球石灰岩風化土)直上に根石部分ないしは二三段程度が積まれた状態で、さらにその切り石内側には拳大程度のグリ石が充填されていました。このことから本来石垣のような構造物であったものと考えられました。しかし昭和初期頃に想定される屋敷石垣の配置とは合致しないことから、当該期よりはやや古い時代の遺構の可能性があります。ただし共伴遺物を含んでいないことからその遺構の具体的な時期は明らかではありません。

一連のこれまでの調査結果から、建物に関わる明確な遺構はほとんど残されていない可能性が強くなりました(ただし既報告した池をはつた岩盤において確認された溝状抉り遺構が唯一可能性のあるものです)。

### ②主庭部分の遺構について

第4次および第5次調査においては園路部分を中心に調査を行いました。先述のとおり園路は基本的に石敷で作られています。築山後方ではそれが途切れた状態となっていました。

調査により南側の園路ではさらに石敷き園路の延長が確認されました。「喜」文字脇から岩盤に貼りつけもしくは嵌め込むかたちで上

へと伸びており、途中で分岐します。分岐した一方はさらに伸びて岩盤平場の縁にすり付け北側へ転進しつつ終わります。ここより南側では検出されませんでしたので石敷きでの園路はここで終えるようです。別のもう一方は分岐部からターンして下の平場方面へと降りて行きます。

北側と中央の園路の石敷きは築山の脇を登り切ったところで終わります。したがって築山裏の園路に石敷きはみられません。しかしここでは代りに細かい枝サンゴの砂利層の薄い堆積が認められることから、当時はそれで敷き詰めていたものと考えられます。

築山裏手からさらに東方、斜面下の弓場へと至る園路が検出されました。ここでは殆ど階段を設けないスロープ状の形態をとっていますが、他の園路とは異なる特徴がみられます。それは、基本的には他の園路のそれと同じく平滑な面の石敷きなのですが、勾配のきつい箇所では細かな礫で充填する手法をとっていることです。通行の際の滑り止めであると同時に施設としての園路そのものがずれ動くのを防ぐための工夫と考えられます。

築山から龍頭間の水路の実際の状況がほぼ判明しました。まず水槽からは切り石をコの字に組み繋げて伸ばし、表面を漆喰で目張りしています。途中において岩盤へすり付けて同じく漆喰で繋げています。さらに岩盤の不規則な形状の隙間や高低差を利用して、漆喰で水路を成形しています。水路の上には礫を被せて暗渠としています。この水路を含め上方の水槽などは内部の写真測量を実施して図化しています。

第6次調査では、冒頭でも述べたとおり本

庭園の最も大きな特徴のひとつである池については、次の点にも留意して作業を行いました。

池の形状のみならず漆喰の違いや池の状態の違いなどから修繕の痕跡が読み取れないか。さらには作出の時期やそれぞれの新旧関係の手掛かりが得られないか。

そこで、池の状況特に漆喰の塗布および池そのものの傷み具合の状況についての調査を行いました。主に目視による作業ですが表面を覆っている漆喰の色や質感、表面の素地の状態、混入物の有無や種類の違いなどを観察しその場所や範囲を記録しました。

また同じく岩盤や漆喰の傷み具合についても表面の摩耗やひび、欠落や割れなどを観察し記録をとりました。

今のところ明らかに後世の部分的なセメント補修の痕を除けば概ね同時期に作出されたと考えるのが妥当かもしれません。ただそのなかで、池の内面内挾の形状や深さの違い、さらに漆喰の状況の違いにより、「常」文字より南側の二つの池は北側の他の五つの池とは差異が認められましたが、特に最も南側の池は顕著で、他より後出のものである可能性が出てきました。

池についてはさらに池同士での高低差に関連してそれぞれの池の縁のレベリングを試みました。これまで池の段差について、上位の池から溢れた水が下位のそれへと順次注がれていくいわゆるカスケードをなしているのではないかと想定もあったからです。レベル計測では特に水の流出を意図した痕跡は確認する事ができず、実際水を注入しての実証実験においても上位から下位へと順次注がれていく

様子の無いことが確認されました。池全体において上位から下位へと水の循環するシステムではないことがこれで分かりました。

第8次調査では築山裏手の園路の下、東側の石積みの状況を確認しました。

石積みは上下二段にわたって斜面に沿って伸びており、上段はそれによって築山裏側の園路を形成しています。やや小振りの切石によるもので斜面の造成土状に石を据えて立ち上がっています。

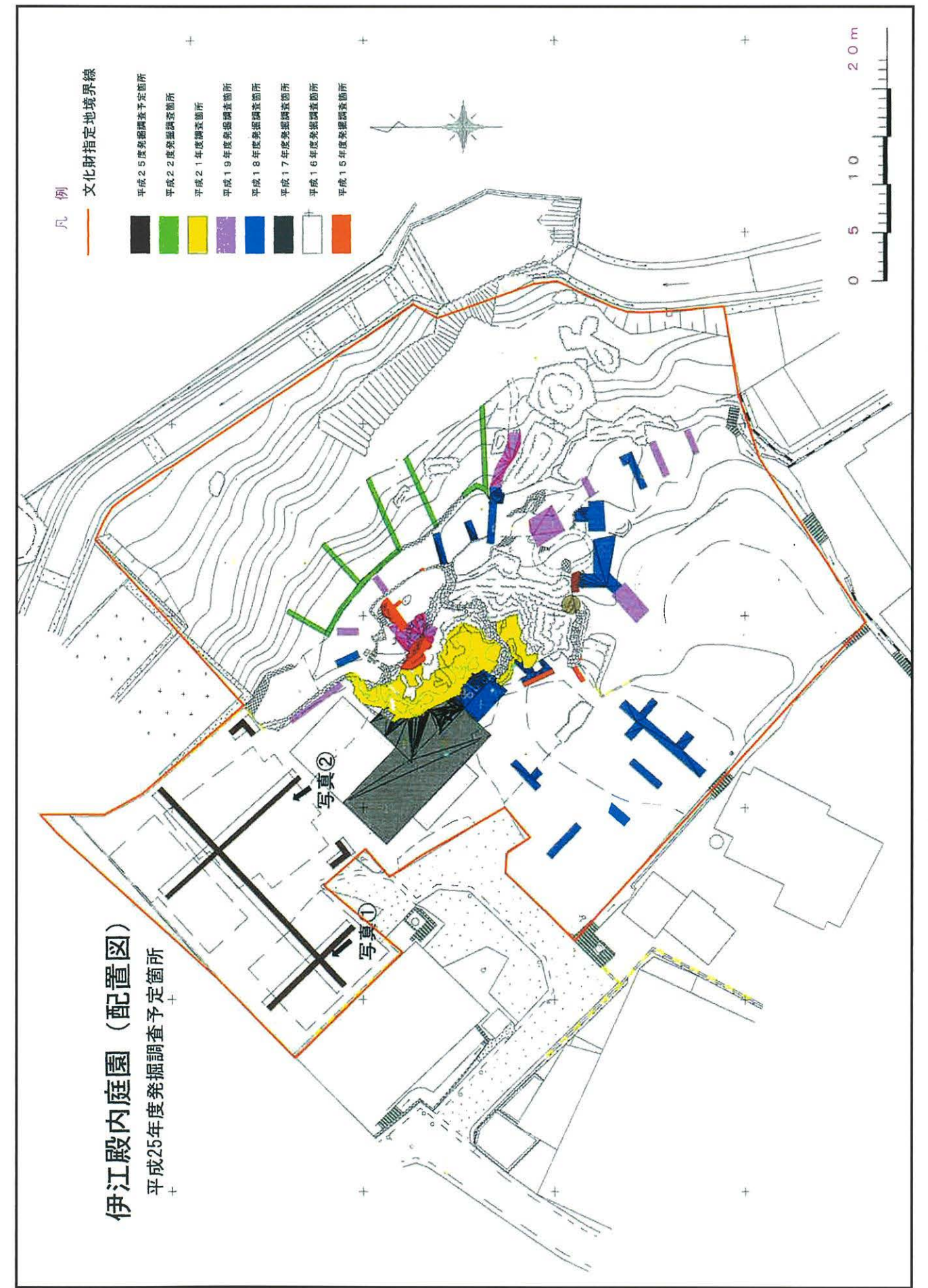
上段からやや下位斜面の中腹辺りに下段の石積みが設けられています。南側では転石と思われる岩塊を利用しそれに乗せたかたちで積みが立ち上がっています。下段の石積みは傾斜のやや緩やかになる北側中途ではみられなくなります。

## 5 おわりに

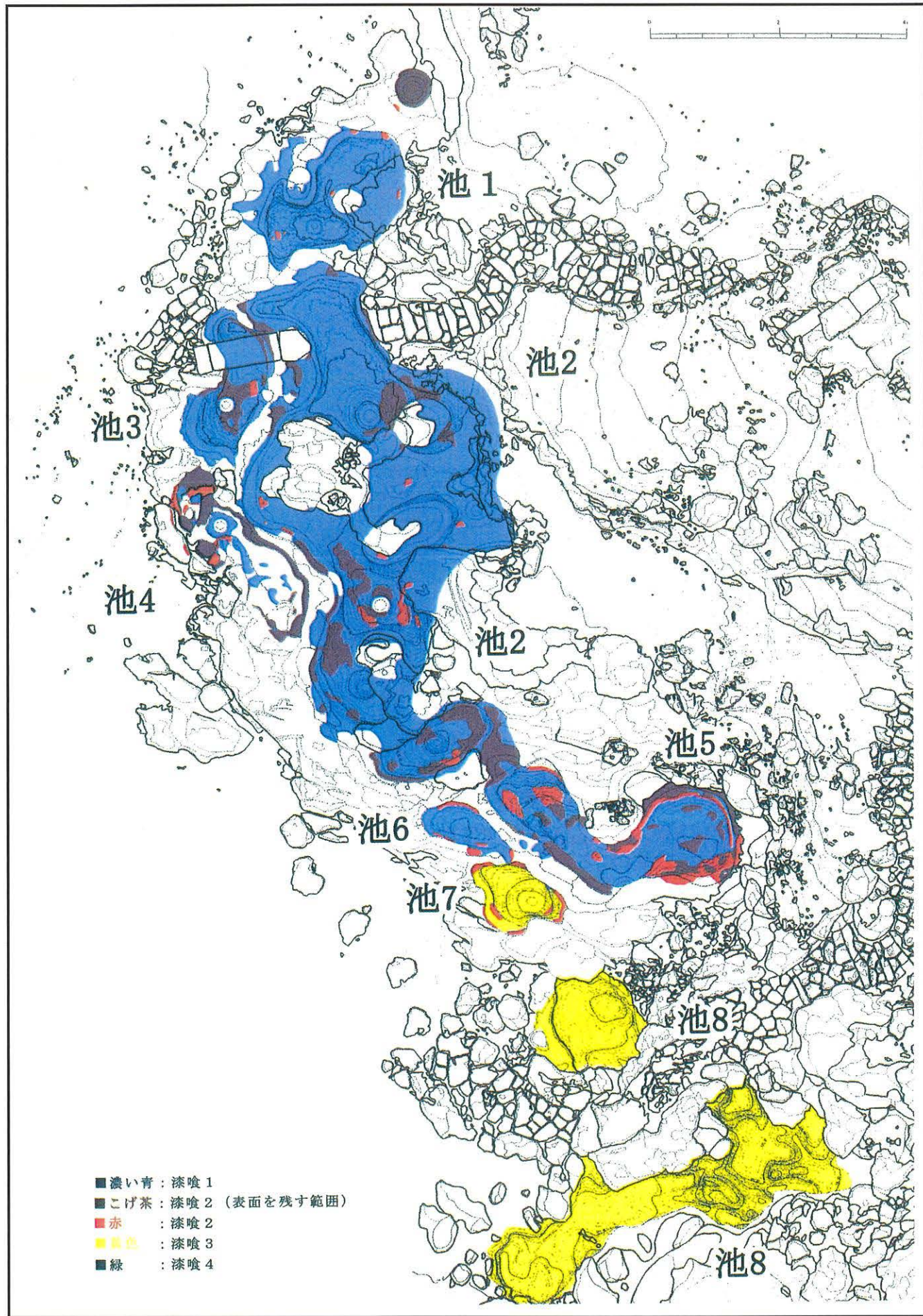
第8次となる今次調査においてこれまで継続して行ってきた発掘調査については一応の区切りとなる予定です。これまでに得られた資料および知見は今後の整備に向けての基礎資料となりますが、同時により詳細な分析を経て発掘調査報告書(伊江殿内庭園整備報告書・《仮》)として刊行する予定となっています。



第1図 伊江殿内庭園の位置図



第2図 伊江殿内庭園の調査箇所配置図



第3図 漆喰塗布範囲（作業図面）



石垣と思われる遺構の検出



検出された園路



園路の実測作業



「巣雲」後方部での発掘



築山後方斜面の土留め石積み



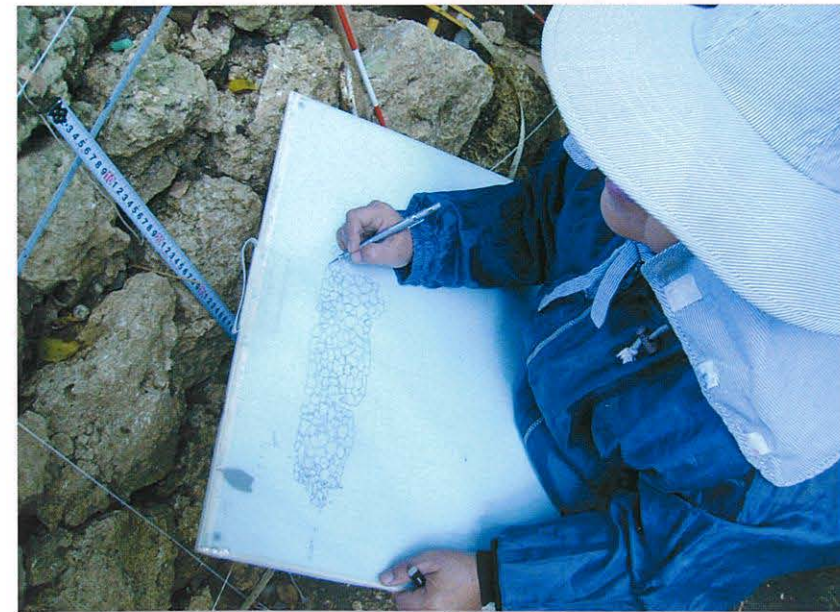
弓場へ下りる園路



築山後方斜面の土留め石積み



池漆喰調査のための実測作業



土留め石積みの実測作業